

はじめに
伊集院 利明

本シンポジウムは、仕事のやりがい、有意義性をめぐって、一つの学問分野に限定されな
い、多分野の視点からの考察を展開するものである。

まず、このシンポジウムを企画した私が、このシンポジウムを企画するに至ったきっかけ、
経緯から説明させていただきたい。

私がこの企画を思いついた具体的なきっかけとなったのが、私が別の分野の、別とは言え
隣接した分野である、生の有意味性の哲学の研究をしている際に、それとの連関で、仕事の
問題について調べた際に、*Oxford Handbook of Meaningful Work* (Yeoman R., Bailey C.,
Madden A., Thompson M. eds 2019. OUP.) という論文集 (本) に出会ったことにある。こ
れは、一つの限定された学問分野の論文集ではなく、論文執筆者の専門領域が哲学、社会学、
心理学、経営学、経済学等、極めて幅広い領域からの参加によって成り立っている、学際色
が極めて強い性格のものである。そしてそれ以上に、収められたそれぞれの論文が、他分野
の学者もが読むことを十分配慮して執筆されており、学問分野の垣根を超えた共同研究の
開拓への志向性の極めて強いものになっていることがたいへん印象的であった。

それが印象的であったのは、次の事情にもよる。昨年、私は本シンポジウムの姉妹編と言
えるようなものを企画した。幸福についてのシンポジウムであり、「幸福を考える——東洋、
西洋、実証研究」と題したもので、私つまり哲学の専門家以外に、東洋思想、心理学、社会
学、西洋史のそれぞれの研究者による分野横断的な趣旨のものであった。私自身は諸価値の
哲学的研究に従事しているが、ちょうどそのころ、生の有意味性 (という価値) の研究に一
定の区切りをつけて幸福の研究に向かおうとしていた時であったので、このシンポジウム
は、様々な分野の成果にあずかることにより、私自身にとって、極めて有益なものとなり、
学問分野横断的な研究の有意義性を極めて強く実感させてくれるものとなった。そこで、そ
のいわば続編として、いま言及した *Handbook* を参照に、仕事の有意義性に関して同様の
シンポジウムが企画できないかと思立ち、自分自身は、仕事の有意義性という分野の研究
者というにはほど遠いものであるにもかかわらず、あえて企画をさせていただいた次第で
ある。

仕事の有意義性、やりがいというテーマが、今日のまさに現時点において扱うにふさわし
いものであるということは特に言うまでもないと思われる。仕事は多くの人間にとって重
要なものである。もちろん人は、仕事にやりがいを覚えなければ、有意義な人生を送れない
などということはけっしてない。しかし、現実 (少なくとも現状においては) 多くの人は
人生のかなり多くの時間を仕事にかけている以上、仕事に充実感を感じられないことはけ
っして小さくはない問題である。さらには、仕事において、生の他の諸局面において有意義

性を見いだす力も養われるという面があるらしいことを考えるならば、仕事の有意義性は、人生の全曲面にも波及する重要性を持つこととなろう。

このように、仕事のやりがい、有意義性は、人間の生きがい、幸福感全体にとって極めて重要な役割を演じる。

現在において、一方で、技術の高度化などに伴い、人間が仕事の有意義感を得られる場が、減少しつつあるのではないかという懸念がしばしば表明される。他方で、それにも関わらず、それなりに多くの人が、現在においても、仕事に有意義性を感じているという、そして、一見するとやりがいを感じられないのではないかと思われてしまいそうな、反復的な仕事の場においても、仕事の有意義性を見出している人々がいるという報告や、労働者の三分の一もが（職種や階層にほとんど関係がなく）自分の仕事を **calling** として受け止めているという報告がある。さらにもう一方で、今日において、様々な形で格差が問題となる中で、格差は単に収入についてのみでなく、有意義性のある、あるいは人間が有意義性を感じられる仕事の配分についても拡大しているのではないかという問題がある。さらには、A I の発展がそうした格差拡大の傾向にどのような影響を及ぼすかも注目される。

仕事の有意義感がどのように成り立つのかを解明することは、今日の社会においてはきわめて重要度の高い課題である。本シンポジウムは、こうした仕事の有意義性、仕事に対する人間の有意義感を、一つの学問分野に限定した視野からではなく、多角的に考察するための、見通しを与えることを狙いとする。先に述べたように、この分野において、諸学間の横の連携を図っていく必要性は、世界の研究においても、注目されている。様々な分野を横断し、相互連携、相互刺激を図っていくことにおいて、仕事の有意義性についての研究は、より生産的になっていくであろう。特に哲学においては、この分野は、研究がやや遅れた分野、とりわけ実証研究に比して遅れが目につく分野に見えないこともないだけに、他領域への参照は益するところが大きであろう。